



| | |
|------------|---|
| Title | 北部九州の宗教文化 -国東半島における「鬼会」の研究 |
| Author(s) | 福島, 邦夫 |
| Citation | 長崎大学教養部紀要. 人文科学篇. 1994, 35(1), p.115-122 |
| Issue Date | 1994-07-30 |
| URL | http://hdl.handle.net/10069/15345 |
| Right | |

This document is downloaded at: 2019-01-19T11:01:54Z

北部九州の宗教文化

— 国東半島における「鬼会」の研究

福 島 邦 夫

Notes on the Study of Religious Culture of Northern

Parts of Kyushu : A Study of “*Onie*” of Kunisaki Peninsula

by Kunio FUKUSHIMA

はじめに

国東半島は大分県の北東に位置し、瀬戸内海に突出した円形の小さな半島である。両子山という標高七二メートルの山を中心に無数の放射状の小さな谷が周囲の海岸にむかって刻まれており、その谷をながれる小川の川下に小規模な平野が形成されている。半島の至る所には奇岩がそびえ、海岸や山上には古代からの祭祀遺跡があり、岩窟や石仏がいたるところに見られる。山や谷の奥に残る寺院には平安時代からの仏像がのこされており、「国東塔」とよばれる特異な仏塔も残されている。ここは古代における宗教文化の先進地域であった。さて、国東半島をはじめとする北部九州の山岳宗教に関しては、これまで、中野幡能氏による研究がある。中野は、北部九州の山岳信仰においては、豊前の英彦山をはじめ、求菩提山、など白山神をまつていない山はないといってもいいほどで、その白山信仰は日本の北陸加賀の白山に由来するものとは考えにくい。むしろ中国や朝鮮の慶尚北道、江原道の境にある、太白山、小白山の信仰に直接由来するものではないかという見解を提出している。¹⁾ 長崎県の平戸、対馬にも白山をまつる山岳があり、²⁾ 北部九州の宗教文化を考える上で、この見解は無視できない重要な問題を提起するものとかんがえられる。国東半島の六郷満山の中心であった宇佐八幡の御許山にも白山が天下っている。³⁾ しかし、この見解を実証するためには朝鮮半島の山岳宗教との詳細な比較研究が必要であることはいうまでもない。本稿ではそうした問題をとりあつかう前に日本の山岳宗教の古い形をのこす国東半島における民俗信仰の特質をまず明らかに

しておく必要があると考え、そのために、平安時代からおこなわれてきたと考えられる宗教行事、「鬼会」を中心に考察する。なかでも特に「鬼」を中心に考察を進めたい。「鬼」についての観念が将来の比較においても大きな鍵をにぎっていると考えられるからである。むろん、宗教行事だけでは、民俗信仰の特質の一端を垣間見たにすぎず、全体像の解明にはまだほど遠いのであるが、民俗学的手法の利点として、研究者が文献のみではとうてい得ることができないような情報を立体的に把握することができる。そうした利点を生かし、「鬼会」の意味を考えてみたい。

国東六郷満山の宗教

ここでは紙数の関係上、六郷満山の仏教文化の大きな特徴と思われる点を若干指摘しておきたい。六郷満山とは国東半島における天台宗寺院の総称である。伝承では六郷満山は養老年間に「仁聞菩薩」によって開かれたとされるが、この仁聞菩薩は八幡の化身であるといい、⁴⁾ 人母菩薩という女神であるという。そのことは中山太郎、柳田国男などによってすでに説かれている。⁵⁾ しかし、中野幡能氏も指摘するようにこれは宇佐の八幡が童形で天下ったこと、および当地にのこる母子信仰からすれば、「仁聞菩薩」とは八幡の母菩薩であるはずである。⁶⁾ そうすると、これは中央との関係ができ、八幡が応神八幡となる以前の姫神として古い八幡神の信仰の形態であり、その信仰を六郷満山に残すものといえよう。この姫神信仰は田村圓澄氏によれば、道教の女道士の形象を残すものともいう。⁷⁾ 六郷満山は宇佐八幡の修行の寺院として、九世紀頃、次第に開拓されていった。初期の記録には寺院の名称として「岩屋」という名を持つものが多く、六郷満山には修行のための岩窟が多くあったのであろう。修行の行場としての岩窟、草堂がそのまま寺院となっていったと考えられる。ちなみに、国東のみならず英彦山、求菩提山などをはじめ、北部九州には山岳に岩窟寺院の遺跡が多く、この点からもすでに述べたごとく、新羅、高句麗仏教との関連が指摘されている。⁸⁾ 豊前における仏教寺院の建立は古く、白鳳・奈良時代にさかのぼり、当時の寺院の跡が数多く、発掘されている。宇佐八幡が中央の正史に登場するのは天平九年（737年）であるが、当然、それ以前から、渡来系の氏族である辛島氏や大神氏などによってまつられていた原始八幡神があったはずであり、仏教公伝以前に当地に仏教が私伝されていた可能性がある。宇佐八幡は『宇佐八幡託宣集』によって知られるごとく、シャーマニズムに道教と仏教の相貌をそなえた極めて異国的な神であり、そのことが六郷満山の仏教文化に独特のおもむきを与えている。また、それにくわえて指摘しておかなければならないことは「天童信仰」の存在である。平安時代からの山岳修行の中心であった、長安寺に

は「太郎天童像」が残されている。太郎天童像は大治五年（1130年）の銘をもつ聖徳太子像に似た神像であるが、六郷満山にみられる神像である。これを中野幡能氏は天狗と同様に山の精霊を顕したものと見ている。⁹⁾しかし、対馬にも山上にまつられた天童があることから、私はこれはやはり、天から下った神霊が山頂にまつられたものと思う。そして、朝鮮の新羅神話における「阿智」のように童児としての神霊が形象化されたものと考えられるように思う。つまり、国東の六郷満山には仁聞菩薩という母神と太郎天童という子神がセットになって存在するわけである。いずれにせよ、国東の六郷満山には日本の他の箇所には例を見ない独特の宗教文化が栄えていたといえるだろう。

鬼 会

鬼会は伝承によれば、仁聞菩薩が養老のころ（八世紀初め）、国東六郷二十八寺の寺院の天台僧を集め、国家安穩、五穀成就のため「鬼会式」六巻を下賜したのがはじまりと伝えられている。¹⁰⁾鬼会は平安の記録にすでに修正会と修正田が出ており（夷岩屋の修正会の田）、また富貴寺には行道に用いた平安初期の面（久安三年、〈1147年〉の銘）があることから、平安時代にはすでに何らかの形の修正会が行われていたことは確かである。¹¹⁾中世から、近世にかけても、鬼会が盛んに行なわれていたことは、各寺院に残された鬼面の墨書等からも明らかである。各寺は組を作り、お互いに助け合いながら、この行事を行ってきた。おそらく、六郷満山という組織が維持される上で、鬼会は峰入りと並んで、大きな役割をはたしてきた行事であったと考えられよう。また、国東にはいまなお、仏教信仰が生きていると言っても良いが、鬼会はまた人々に仏教を教化するために大きな役割をはたしたことは確かであろう。鬼会は明治のはじめには二十ヶ寺の寺院で行なわれていたが、現在では西組、および中組が天然寺（豊後高田市長岩屋）で毎年、旧正月の七日に行い、東組が隔年に、旧正月の五日に成仏寺（国東町成仏）旧正月の七日に岩戸寺（国東町岩戸）と交代で行うようになってきている。ここではそれらの現存する三つの事例を組み合わせながら、鬼と咒師作法を中心に鬼会の考察を試みよう。

岩戸寺、成仏寺などでは現在、午後の四時ごろから、昼の勤行が始まり、本堂もしくは、講堂などで読経を中心にした法要が営まれる。旧年の汚れをはらい、神仏を勧請することなどを目的とした読経である。祭壇は荘厳がなされ、化粧をほどこした鬼の面や香水棒（後述）午玉杖などが飾られ、オカガミと呼ばれる餅を祭壇の前面に吊す。さらに、ミッターマ、ヒッターマ（満珠、千珠、鬼の目など）といわれる小さい餅もおかれている。これは後で、餅撒きにつかわれる。天然寺（西組）など

では荒鬼の行事のときに鬼の目餅が四個撒かれ、その餅を拾ったものは「鬼さん目、鬼さん目」とはやして逃げる。鬼は松明の火で拾ったものを打とうとする。打たれれば、その年は無病息災が保証されるという。鬼の持つ松明と逃げ惑う群衆で場内は騒然となるが、これを五来重氏は、餅は鬼のみたまで、それを年玉として、皆に分けてくれることをあらわしたものであろうという。¹²⁾

鬼会のもう一つの大きな特徴は松明の行事である。夕刻七時ごろ、大松明をかたぐ、村人達（タイイレシ）の水ごりの後、岩戸寺、成仏寺では四本、天然寺では三本が点火され、本堂や講堂の前庭に立てられる。松明はダイワに十二本のかずらを巻いたもので、鬼のもつ小松明とともに鬼会が火の祭りでもあることを明確にしている。永松敦氏も指摘するように北部九州では、正月の六日の晩を年の節目とする考えがあり、¹³⁾ 七日の朝に火をたいて、ホッケンギョウ（南九州では「鬼火たき」という）と称して、火をたく行事を行うところが長崎県でも沓岐郡や北高来郡を中心によく残っている。

さて、堂内の行事にもどる。紙数の関係上、咒師作法を中心に見ていくことにするが、鬼会では咒師と鬼が並んで行われている。しかも、後述するように鬼は追難の鬼として追いはられるのではなく、人々に福を授ける存在であって、鬼会の最後には村内の家々を祈祷して回る。このことは極めて古態を残しているといえよう。さて、米華から立ち役（立って様々な所作を行う。）にはいるわけであるが、私が注目したいのは、立ち役に先立って行われる鬼会の演目にのこる「法咒師（ホズシ）」という名称である。これこそ、咒師作法の古形を残したものと思われるからである。咒師（シュシ）とは能勢朝次氏によれば、咒禁師（ジュゴンシ）のことであり、もともとは百濟より渡来した口に咒文をとなえて、加持祈祷のようなことをする僧侶の一種である。¹⁴⁾ 咒師は修正会や修二会において、道場の結界、鎮壇、香水加持、あるいは、護摩をたくななどの密教関係の所作を担当したものであるという。後にはこの咒師作法から、芸能としての能楽、猿楽が発生したと考えられるきわめて重要な作法なのである。¹⁵⁾ 能勢によれば、芸能民となった猿楽の徒が後にこの咒師作法を行なうようになったためにそれらと区別するために密教の僧侶がおこなうものをわざわざ法咒師と呼んだという。¹⁶⁾ 法隆寺や薬師寺の修正会や修二会においても、この咒師作法があり、それらは最後に咒師が剣や鈴を持ち、あるいは拳印を結んで、須弥壇の回りを走り回る所作である。それらを咒師走りと呼んでいる。さて、鬼会の法咒師の作法は僧侶二人が立ち、剣、香水棒、鈴を左右の手にもって、真言をとなえながら、足踏みなどの動作をくり返すもので、極めて呪術的なものである。さらに注目されるのは法咒師の持つ香水棒という法具である。香水棒は朴の木のかずりかけである。岩戸寺は三段、成仏寺と天然寺のものは四段の刻み込みがあり、五

穀の豊饒を祈る穀霊のよりしろであるといわれている。¹⁷⁾ 香水はまた聖なる水を象徴し、伝承では仁聞菩薩と弟子の法蓮が水を浴びて、滝行しているところをあらわしているともいう。¹⁸⁾ さきのにのべた「火」とともに修正会のもうひとつの主役、「水」の行事でもある。さて、立ち役に話を戻そう。その後、錫杖までの次第が終了すると、畳を上げ、米華から、立ち役に入る。米華では下駄をはいた二人の僧侶が、右手に香水棒、左手に白米、わら、ミッタマ、ヒッタマ（先述の餅）をもち、それらを撒いて、五穀豊饒を祈願するのである。次の開白は香水棒をもち、「五龍王」を唱える。香水棒を床にうちつけるなど、結界鎮壇の所作である。下駄の音、打ちつける棒の音には地霊を鎮める働きがあるのであろう。次の香水には立香水、賢却香水、西方香水、四方香水とあるが、いずれも香水棒を頭の上で回す。打ちあわす、持ちながら飛び床にうちつける、持ちながら後退するなど複雑な動きを伴ったもので、咒師作法のハイライトといえよう。奈良東大寺の修二会では達陀松明（だったんたいまつ）が登場するが、これは菊の花の形のけずりかけを松明に四十個余り打ち込んで、花が咲いたように仕上げたものである。達陀の妙法では散丈、麗水器を持った水天と松明を持った火天がダダ（足踏み）をする。¹⁹⁾ 鬼会の香水は火天と水天の要素の内、火天の松明が鬼やタイイレシの松明に吸収され、残った要素と水天がむすびついたといわれるが、²⁰⁾ 私はこれだけの所作が残されていることから、香水棒は国東のみで発達したのではなく、もともとの咒師作法にこうした手があったのではないかと思う。それについては、また機会があれば、検討してみたいと思っている。次に四方結を行う。これはその名のとおり、道場結界の所作である。次に鈴鬼をおこなう。鈴鬼もまた、国東独特のもので鈴鬼面は岩戸寺はヒョットコとオカメの神楽面であり、天然寺の面もそれに近い（ヒョットコ面ではない）。成仏寺の面は白地に黒の翁面のような独特の面である。手に鈴をもつ。（天然寺では米をいれたガラガラのようなものを持つ。）これも、また咒師の鈴の作法が芸能化されたものと考えられている。荒鬼の霊を鎮めて、鬼招きをする意味であると記されている。²¹⁾ そうすると荒鬼のモドキのような存在とも考えられるが、翁と鬼はもともと表裏一体のものであったと指摘されるように、²²⁾ これは鬼の柔和な性格の側面をあらわすものではなかろうか。

さて、国東の鬼には三種類の鬼が登場する。災払い鬼、荒鬼、鎮鬼である。岩戸寺では災払い鬼、鎮鬼の二つしか登場しない。これについては興味深い伝承がある。ある年、荒鬼に扮した岩戸寺の市の坊という僧侶が寺迫のナツメ（地名）の鬼どもを越え、暴走して村外へ走り出してしまった。介錯はとり押さえようとしたが、荒鬼は闇夜の中に消えてしまったという。翌朝、一の坊は谷川に倒れているのを発見されたが、鬼の面はついに発見されなかった。鬼の面は遥かに離れた伊美の権現

の鼻に食いついていると噂がたった。そして、鬼会の夜になると岬に光がともるといふ。²³⁾ 鬼が村境をこえることには極めて強いタブーがあったことが知れる。鬼は鬼走りあるいは飛行と言われるように境内や村の中を走りまわるわけであるが、たとえば、岩戸寺や成仏寺では本堂の前庭でタイイレシとともに「三々九度の法」、「二一走」「一五走」「九走飛行」を演ずる。観客は「鬼ハヨウ、ライショハヨウ」といひながら、鬼をはやす。そして、輪を作り、最後に輪の中にうづくまる。鬼は手にした松明で観客をたたき、厄払いをするのである。それから、本堂の裏山の六所権現社にお参りをする。成仏寺では部落が上、中、下の三つに分かれているので、三鬼は三方面にわかれて、松明をもった介錯とともに村の各家を祈祷してまわる。(天然寺では鬼が部落をまわることはない。) 家々では鬼は土足のまま、座敷に上がり、仏壇にろうそく、線香を上げ、数珠をもんで拝み、般若心経をあげる。病人がいれば、松明で厄払いをするという。その後、鬼は御神酒を振る舞われる。そして明け方ちかくなって、本堂に帰ってくる。酒のいきおいもあって、鬼は本堂の中を暴れまわる。やがて、介錯によって、取り押さえられ、院主が鬼のおくわえ(餅)を口にくわえさせる。鬼の体を縛っていた藤ずるがとかれ、僧侶の姿にもどる。演じた僧侶の話によると、このときにどっと疲れが出るという。こうして、鬼会は終了する。

国東の鬼は、追難で追い払われる鬼とは異なり、村の各家を訪れ、人々に祝福をもたらすものである。従来、このことは国東の鬼が祖霊の性格を持つ者であり、仏教信仰と民俗的な祖霊信仰がみごとに融合した例として説明されてきた。しかし、この説明は果たして妥当であろうか。久下隆史氏は鬼が追難と呼ばれるように杖で打たれたり、追い払われたりするようになったのは散所法師によって鬼がになわれようになった鎌倉期以降のことで、それ以前は修正会の行法の鬼として考えられたのは、ビナヤカ神であるという。ビナヤカは本来は障礙神・常随魔といい、仏道修行者の誘惑者としてしばしば、悪逆を働いてきたが、仏道に入って障難を鎮める神となったという。平安時代の記録に修正会の鬼をビナヤカと呼ぶところから、もともと、修正会の鬼は障難を鎮め、施福的な性格をもったものであったと述べている。²⁴⁾ 国東のみならず各地の芸能に鎮鬼(しずめおに)という鬼が登場するのはこうした理由からであろう。京都や奈良といった中央の修正会・修二会の行法の最後に鬼が登場し、これが竜天・毘沙門・鬼のという三つのセットが一つのまとまりをなし、修正会の主要な宗教的役割を果たしていた事はよく知られている。そのことをいち早く指摘していたのは森末義彰氏と能勢朝次氏である。²⁵⁾ 森末によれば、三者は独立した演目を成すものであったが、諒闇の年、修正会の他の芸能演目が中止された時もこの三者はおこなわれた。したがって、高野辰之氏のいうようにこれ

らは修正会の咒師の番外余興といわれるようなものではなく、本格的な重要性をもったものであったという。²⁶⁾ 竜天は仏法の守護神である天竜八部衆を代表させたものであり、障難を鎮める役割、毘沙門は暗黒の属性であったが仏法に入ると共に鎮護国家の四天王の一つとして尊崇されるようになったもので、障難を鎮め施福的な性格をもつ。能勢の見解もほぼ同じであるが、森末が咒禁師と咒師を異なったものと見るのにたいし、能勢は両者は同一のものであるとみるところが異なる。²⁷⁾ しかも、能勢は修正会のすべての芸能は本来、法咒師（僧侶）によって行われたもので後世には、猿楽の咒師によって代行させるものとなったと述べている。²⁸⁾ 国東でも鬼は同様に、僧侶によって執り行なわれ、障難を鎮め、施福的な性格をもつ。そうするとこれは従来言われてきたように国東の民俗信仰（祖霊信仰）と仏教信仰が結びついて、ローカルな鬼の信仰になったものなどでは決してなく、施福的な鬼の本来の信仰が国東にそのままに残されたものではないだろうか。この点で注目されるのは佐賀県と長崎県の県境にある佐賀県藤津郡太良町、竹崎の観世音寺の鬼祭りである。毎年正月の五日と六日に行われる行事であるが、童児舞には古風な咒師の作法が残っており、水天、火天の面が残されている。また、鬼は登場しないが、鬼の面を裸の若者が奪い合う行事があり、鬼はここでも、追いはらわれるものではない。²⁹⁾ また、正月七日に行われる福岡県三潞郡大善寺、玉垂神社の鬼会でも鬼は追いまくられながらも、みそぎをして、最後に本殿におさまり、追放されることはない。³⁰⁾ このように北部九州の宗教文化では鬼は追い払われる対象でなく、むしろ歓迎される存在なのである。中国大陸においても、鬼面的一种である牛頭が家の守護神としてまつられることを諏訪春雄氏が報告している。³¹⁾ 北部九州の宗教文化には中央で失われた古型が、あるいは大陸から伝えられた原型が、そのまま残されている可能性がある。今回は紙数の関係上、多くについてふれえないが、北部九州の宗教文化を見る場合の一つの視点として国東の鬼会を例にとりて考えてみた。

注

- 1) 中野幡能、「求菩提山修験道の起源とその展開」、中野幡能編『英彦山と九州の修験道』、名著出版、昭和52年、p. 119。
- 2) 具体的には対馬の白岳、平戸の安満岳など。
- 3) 中野幡能、『六郷満山の史的研究』、藤井書房、昭和41年、p. 3。
- 4) 西田長男「宇佐八幡宮成立の周辺」、『日本神道史研究』、第8巻、講談社、昭和53年、p. 451 中野幡能、『八幡信仰史の研究』、吉川弘文館、昭和42年、pp. 199-200。
- 5) 中山太郎、「仁聞菩薩—八幡神の信仰を持ち回った巫女物語」、『旅と伝説』(10ノ3)、柳田国男『妹の力』、

- 全集9巻、p. 105。
- 6) 中野幡能、同前4)。
 - 7) 田村圓澄、『古代朝鮮と日本仏教』、講談社学術文庫 p. 182。
 - 8) 田村圓澄、『仏教伝来と古代日本』、講談社学術文庫 pp. 132-140、大和岩雄、『秦氏の研究』、大和書房、平成5年、p. 365。
 - 9) 中野幡能、同前3) pp. 5-10、同前4) pp. 703-708。
 - 10) 大分県教育委員会、『国東半島の修正鬼会』、昭和52年、p. 2。
 - 11) 同前、10) pp. 4-5。
 - 12) 西田啓一、「国東半島の鬼会と咒師」『講座日本の民俗宗教6』、弘文堂、昭和54年、p. 282-283。
 - 13) 永松敦、「九州の鬼」『フォークローア第1号』、本阿弥書店、平成6年2月、p. 125。
 - 14) 能勢朝次、『能楽源流考』、岩波書店、昭和62年、pp. 96-98。
 - 15) 同前、14) 「咒師考」および「翁猿楽考」 pp. 94-252。
 - 16) 同前、14) p. 131。
 - 17) 西田啓一、同前12)、pp. 273-274他。
 - 18) 藤田庄一、「国東の風土と鬼会」『仏教行事歳時記一節分』、第一法規、出版、昭和63年、pp. 180-181。
 - 19) 佐藤道子『東大寺修二会の構成と所作一中』、平凡社、昭和54年、pp. 386-419。
 - 20) 西田啓一、同前12)、pp. 276。
 - 21) 西田啓一、同前12)、pp. 279。
 - 22) 大和岩雄、『秦氏の研究』、大和書房、平成5年、p. 399。
 - 23) 吉武直彦、「修正鬼会考鬼夜んはなし」『国東半島の文化一第7号』昭和52年4月、pp. 22-25。
 - 24) 久下隆史、「修正会の龍天・毘沙門・鬼」、『村落祭祀と芸能』、名著出版、平成元年、p. 268。
 - 25) 能勢朝次、同前14)、森末義彰、『中世芸能史論考』、東京堂出版、昭和46年、pp. 30-31。
 - 26) 森末義彰、同前25) p. 30。
 - 27) 能勢朝次、同前14) p. 107。
 - 28) 能勢朝次、同前14) p. 120。
 - 29) 市場直次郎、「竹崎の修正鬼会祭」、『西日本民俗文化考説』、九州大学出版会、昭和63年、pp. 159-193。
 - 30) 和歌森太郎、『和歌森太郎著作集14』、弘文堂、昭和57年、p. 265。
 - 31) 諏訪春雄、「鬼の凶像学」、『日本文化研究一6号』、勉誠社、平成6年2月、p. 135。

(1994年4月26日受理)